

## インタープリテーションモデルについて

インタープリテーション科にとってバイブルともいべき書籍があります。「インタープリテーション入門」(自然解説技術ハンドブック) 小学館発行です。本書は米国で出版されたもので、インタープリターを志す人々のための実践的ガイドブックです。

書にはインタープリテーションの基本はトークにあると記され、トークを成功させるためには「組み立て」と「内容」が基本的要素とされています。トークをまとめる方法として、4段階法が紹介されています。

第1段階：つかみ

第2段階：つなぎ

第3段階：本体

第4段階：まとめ

これこそが私たちインプリ科が活動するうえで最も重要かつ基本のトーク組み立てで、先輩の方々はこの「インタープリテーションモデル」(略：インプリモデル)と名付けました。

インプリモデルとは何なのか。その目的、内容、使い方そして果たす役割や効果について学び直し、またもっと使いやすくするために見直す機会が今回訪れました。

従来「インタープリテーション入門講座」を応募型の実習という形で行ってきましたが、令和2(2020)年度に本科講座生向けのカリキュラムに組み入れられることとなりました。

そこでインプリモデルについて再定義を行いました。

### 『インプリモデルとは』

インタープリターが体験した自然の不思議や魅力を他の人に分かりやすく、かつ感動したその思いを上手く伝えるには、順序だてたストーリーとなるシナリオ、すなわち台本が必要となります。

自然観察の場を舞台と例えるならば、ビジターは観客であり、インタープリターは役者です。役者には台本が必要で、この台本にあたるのがインプリモデルです。

このモデルは自分が話す台本であり、また複数のメンバーで実施する時は、同じ内容のインタープリテーションを行うためには不可欠なものとなります。

次にインプリモデルの構成と内容について議論を重ね検討を行いました。

「つかみ」「つなぎ」「本体」「まとめ」の4段階の構成及びその内容について、もう少し分かりやすく使いやすいインプリモデルとなるよう再設計し、インプリモデルの作り方としてまとめました。

### 『インプリモデルの作り方』

モデルは下記の4つの要素で構成されています。

A「つかみ」注意を惹きつける言葉やしぐさで、興味を刺激し、心を捉える

B「つなぎ」導入と本体をつなぐものであり、聞き手の興味へとつなげる

C「本体」プログラムの主要なメッセージ観察や体験により不思議発見へいざなう

D「まとめ」メッセージを要約し、または行動を喚起するという形で締めくくる

ビジターの関心をひきつけ、最も伝えたいことをしっかり理解してもらえるモデルを作るために、

・まず、感動したこと、伝えたいことを『本体』に持ってきます。

・次に『つかみ』が大事です。いくら素晴らしい本体があっても観客を引き込まなければ意味がありません。

・その後『つなぎ』と『まとめ』を作成します。

一方的な話を避け、トークのイメージ作りをし、対話形式のシナリオを作っていきます。

子ども向けのモデルは大人向けのモデルを単にやさしくするのではなく、子ども向けに五感を使い、実際に体験させる内容とします。

※インタープリテーションモデルは次の通りです。